

Title	チャペルを中心とした大学共同体の形成
Author(s)	石部, 公男
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume22, 2007.3 : 101-105
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3239
Rights	

The logo for SERVE features the word "SERVE" in a serif font. The letter "V" is replaced by a stylized quill pen nib pointing upwards and to the right. The letter "E" is replaced by a square box with a checkmark inside.

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

チャペルを中心とした大学共同体の形成

石部 公男

この文章は過日、学内教授会室にてパワーポイントによつて発表した内容を文書化したものである。当日の発表内容と多少異なる点や、省略した点多々あることを最初にお断りする。その発表とは、キリスト教主義大学というより、キリストによつて設立されたという堅い信仰に基づき建てられた聖学院大学が、その本来の設立の理念を具体化してゆく上で、中心となるべきチャペルと本大学の具体的なあるべき姿を考えたものである。

「チャペルを中心とした大学共同体の形成」というタイトルから、大学設立の理念を基に、次の六項目の内容に即して具体的な提言をさせていただいた。

- 1、日本のキリスト教主義学校設立者の思い。
- 2、宣教師の思いを今に伝える。
- 3、明治期聖学院の誕生と大学。
- 4、日本のキリスト教の現状と聖学院大学。
- 5、教育機関としての教師の役割。
- 6、私立大学の経営とキリスト教。

先ず、「日本のキリスト教主義学校設立者の思い」についてであるが、教職員と学生は、現在の日本に存在するいわゆるキリスト教主義と呼ばれる多くの学校が、幕末から明治期にかけて、宣教師たちが己の命と財産を捨て、日本にキリストの業を伝えるべく来日して設立の土台を作ってくれたことを決して忘れるべきではない。否そのことを積極的に記憶に留め、その思いを生かしてゆくようにしなければならぬ。彼ら宣教師たちが自分の全人生を日本の伝道のために費やした尊い思いを一人ひとりが己のものとする時、キリスト教主義大学と呼ばれる大学は命の力を内より發揮することができると思うのである。そのためにはチャペルアワーで、またいろいろな機会を利用して、設立者の思いを伝えてゆく必要がある。実際、現在、多くのキリスト教主義学校と呼ばれる学校を卒業した生徒や学生のうち、自らの卒業学校の設立者のことについて語れる卒業生はどのくらい存在しているであろうか。

残念ながら、私の知るところでは具体的にそのことについて語れる卒業生は極めて少数か、またはいた場合、そのほとんどがキリスト教関係のサークルなどに所属していた者という印象がある。たとえば、東京やその近県にある明治学院大、青山学院大、関東学院大、立教大などの卒業生と接してきた感想からも、このことは残念ながら確信を持つて言うことができる状況である。桜美林大学の創立者清水先生は宣教師ではなかった。卒業生に大学設立の由来を尋ねても、中国北京での清水先生の具体的なことについて語ることのできる卒業生は極めて少ない印象がある。また明治学院大学の卒業生に尋ねてもヘボンの名前は知っていても、その具体的な事柄についてはほとんど卒業生が知らないか、知っていてもヘボン式ローマ字の創始者というぐらいである。宣教師としての思いや行動についてはまったく記憶にないのが現状である。残念ながらこのことは聖学院大学についても当てはまる。ガルスト先生に関する宣教の思いが卒業生にあまり伝わっていないのである。この件でアンケートなど具体的な統計をとったことはないが、これが感想である。

私たち教職員は職場としての大学に長く関わるうち、いろいろな点でこのことについて学ぶ機会に恵まれている。それをどのように学生に伝えてゆくか、その姿勢がすべての教職員に問われているのではないだろうか。

次に「宣教師の思いを今に伝える」という点である。これは単なる知識ではない。彼ら宣教師が、どのような心境で、日本の伝道を考えていたかを知ることである。今は教会もまたキリスト教主義学校と呼ばれる学校も、それぞれの伝統が日本で形成され、教派の教義や経営面でも微妙な問題がより多く存在するようになってきている。しかし、幕末から明治期にかけての宣教師たちは互いに協力し、日本の伝道に力を尽くしてきた。この点ではキリスト教学校同盟の現在の存在をもっと評価し、強力な形にする必要がある。しかし一方、個々のキリスト教主義学校は宣教師がやり取りをした書簡集などについて教派を超えて学生に伝えてゆく努力をもっとするべきであると考ええる。そのことが、結果として、個々のキリスト教主義学校の生きた力になると思うのである。宣教師たちの伝記や書簡集を読むとき、時間を越えてその思いが現代の私たちに伝わってくる。このような教育を、授業以外の場でも、もっと取り組んでも良いのではないだろうか。

第三に「明治期聖学院の誕生と大学」についてであるが、これも歴史的な知識と宣教師の具体的な思いの共有教育ということになる。しかし同時に、当時の日本が政治的にどのような状態に置かれていたかを知ることの大切さを学生が認識できるように、教師が心がけるようにしたい。卒業生が単に知識としてだけでなく、具体的な思いを共有することにより、聖学院大学の建学の理念が命を得るようになるかと考えるからである。これは明治期のみならず、太平洋戦争当時の学院指導者と学院の歴史をも同時に共有するべきであると思う。これは、第四の「日本のキリスト教の現状と聖学院大学」とも関わることである。現在の日本でのキリスト教は戦後の二〇年間の状況と比較すると極めて心もとない状況とも言える。それは伝道の問題であるかもしれないが、キリスト教主義学校自体の間

題でもある。第二次大戦後二〇年から三〇年間程度は一般的に言つてキリスト教主義学校は憧れを持って、ある面ではファッシヨンの感覚で一般に受け入れられてきた面があるともいえる。しかし、現在、オウム真理教の事件や、原理主義(統一教会)、さらには、いわゆるオカルト集団などの問題をきつかけに、「宗教は怖い」「宗教には深入りするな」という漠然とした不安感が一般に社会に広がってきたともいえる。これらが、キリスト教に對しても、漠然とした不安になつて存在していることにキリスト教主義大学はどのように取り組んでいくべきであらうか。これは教師の日ごろの態度にかかつているといえる。チャペルアワーを通して、その真の意味を述べ伝えるとともに、日常の学生たちとの会話の中で、丁寧に信仰のことについて対応することが肝心であると思う。同時に、教職員が、現状に満足するのではなく、絶えず危機意識を持つことも大切であると思う。これは、「教育機関としての教師の役割」でもあるのではないだろうか。教師が自分の信仰に立ち、それを伝承していくことこそが教師の道、と自分で深く確信を持つことだと思ふ。そのためにも、大学におけるチャペルアワーが大切である。しかしこれは決して強制されるものであつたり、またこの大学で職を得るものとしての義務感から参加するのではなく、自らの積極的意思で、内から出る思いとして自然発生的に礼拝に出席する必要がある。大学での礼拝出席が週に一度であらうと、月に一度であらうとそれは問題ではない。その根底に日々の教会生活があればこれは自然に達成されるものだと思ふからである。ただ組織的にこのことを意識した礼拝がなされていけば力は与えられると思ふのである。

明治になつてのキリスト教禁止の高札撤廃は一般に高等学校の歴史でも学ぶところであるし、現在は日本国憲法でも信教の自由は保障されていると考えられている。しかしこれには大きな落とし穴があることをもつと意識すべきではないだろうか。特にキリスト教主義大学に職を得る私たちとしては、日本国の政府や多くの官僚が、現在でも本質的にはキリスト教を積極的には支持しがたい体質をもつていてということをも自覚すべきであると思ふ。この

ことは、昨年第五六回キリスト教史学会大会で中島耕二氏が発表されたことが大いに参考となる。中島氏は「明治三二年改正条約実施と外国ミッションの対応」というテーマで発表されたが、「米国長老教会ミッションを事例として」という副題をつけられた。

この発表では米国長老教会と日本の政府とのやり取りを中心として当時の内務省がキリスト教に対して示した政策の一端が理解できるのみでなく、日本国政府が持つキリスト教に対する心情が現在までも連綿として継続していることを知ることができるのである。国家神道や靖国神社問題もこの文脈で理解することにより、現在のキリスト教主義大学が、強い意識をもってチャペルを中心とした生きた教育活動を地道にまた誠意を持って進めてゆく大切さを理解することができるのではないだろうか。

このようなことを言う私も、その難しさと力の足りなさを実感しているところである。教会生活と、チャペルを中心とした大学生活により、このような私にも力が与えられていることに感謝をせざるを得ない。ともに宣教師の日本伝道の思いに心を向けて努力をしてゆきたいと願う。

(二〇〇六年二月二三日、全学礼拝懇談会)